

「倫理」カリキュラムの改善 ——市民的資質育成の観点から——

胤 森 裕 暢*

1. はじめに

社会系教科の中でも特に公民科は、現代の社会を認識することを通して市民的資質の育成を図ろうとする。すなわち、現代社会について主体的に考察し、特質や問題を認識するとともに、その中で他者とともに生きていくための「人間としての在り方生き方」(人生観・世界観等)を自覚的に追求できる市民の育成を目指している。これからも社会が急速に変化し続けていくことを考えれば、公民科で特に育成すべきは、既に自己の内に形成されている現代社会の認識と、それに対する価値観とを自ら成長させていく(形成していく)資質となろう。

では、公民科の中でも「倫理」はどのような資質の育成を目指しているのだろうか。それはまず、自己形成上の課題と自らの価値観について理解と思索を深めさせ、「人格の形成に努める実践的意欲を高め、良識ある公民として必要な能力と態度を育てることを目指して設けられた」(文部科学省, 2010)のであり、その基本的な性格は、「人間の存在や価値についての理解と思索を深めさせ、自主的な人格の形成に努める実践的な態度を育てる。」(文部省, 1979)という社会科「倫理」の目標を継承しつつ(文部省, 1989)も、より主体的に自己(特に価値観)形成することを目指しているといえよう。また、公民科の中でも特に、合わせて履修することになる「政治・経済」が市民的資質育成のために、

現代社会に対する客観的な見方や考え方を深めさせるのと比較すると、自己の価値観形成に重点を置いているといえよう。さらに今回の改訂では、目標に「他者と共に生きる」という言葉が加わり、内容構成も「生徒の当面する生き方の課題を現代の倫理的課題と結び付けて学べるように」(文部科学省, 2010)改めたところ。これらのことを踏まえると、「倫理」では現代社会が抱える倫理的な問題について主体的に考察させ、それに対する自らの価値観を形成させようとしている。すなわち、公民科で育成しようとする資質の中でも、特に現代社会の倫理的問題の認識を通して、それに対する自己の価値観を形成していく資質を育成しようとしているのである。

しかし「倫理」の実践は、これに十分に対応できておらず、あるべきカリキュラムが構築されていないと考えられるのである¹⁾。特に問題なのは、カリキュラムを編成する上での基準となる学習指導要領公民科「倫理」(以下、公民科「倫理」)が、今回の改訂によってもなお、上記の資質育成のために、十分な内容構成を持ち得ていないと考えられることである。

そこで本研究では、次の3点について考察していきたい。1点目は、市民的資質を育成する観点から公民科「倫理」の内容構成が抱える課題について明らかにする。2点目は、その課題を克服する「倫理」カリキュラム改善の視点を明らかにする。そして3点目は、その視点に基づいたカリキュラムを構想する。

* 広島経済大学経済学部准教授

2. 公民科「倫理」の内容構成の特質と課題

2.1 公民科「倫理」の内容構成の特質

では、公民科「倫理」の内容構成はどのようなになっているだろうか。今回改訂された平成21年版の公民科「倫理」(文部科学省, 2010)の「2 内容」は図1のようになる。

大項目(1)では、生徒の経験を通して青年期の意義と課題を理解させ、自己形成に向けて自己の生き方を考えさせ、現代社会の「倫理的課題」にも気付かせる。続く大項目(2)では生徒の人間としての(あるいは日本人としての)課題とかかわらせ、先哲の思想を手掛かりにして、人間の存在や価値について考えさせる。これらを踏まえて、大項目(3)では自己の課題とかかわ

らせて現代社会の「倫理的課題」について考えさせ、自己の価値観について自覚を深めさせたり、倫理的な見方や考え方²⁾(図1の下線部)、すなわち、現代に生きる我々が直面する課題を「倫理的な視点」からとらえ、自らの課題として考えていく力を身に付けさせたりしようとしているのである。

このように公民科「倫理」の内容構成は、青年期の自己、人間、現代社会の順に、それぞれの倫理的な課題を取り上げている。先哲の思想はあくまでも手掛かりとしながら、課題について考えさせ(すなわち追求させ)、自己の価値観について自覚を深めさせるとともに、倫理的な見方や考え方を身に付けさせようとしており、これらの特質は、公民科の科目として設置されて以来、基本的に変わっていない(文部省,

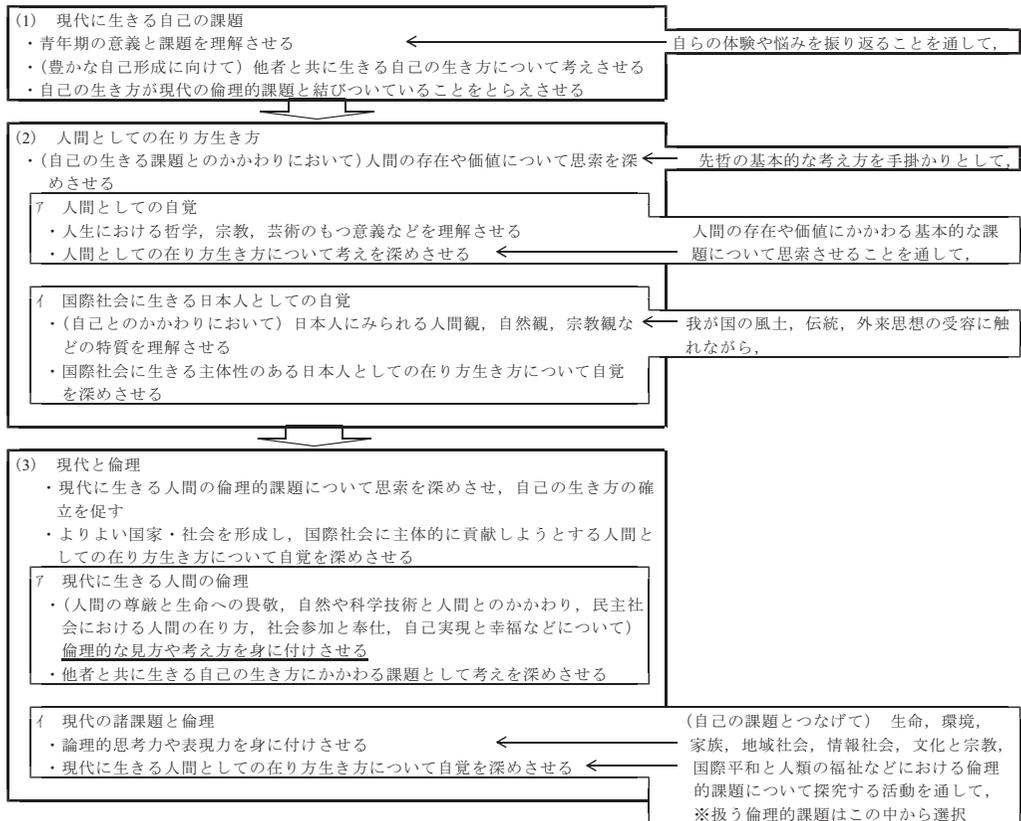


図1 平成21年版の公民科「倫理」の内容構成

1989；文部省，1999）。これまで公民科「倫理」は，上記の特質を持つ内容構成により，現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成していく資質の育成を目指してきたのである。

2.2 公民科「倫理」の内容構成の課題

では「倫理」における市民的資質育成の観点から，この内容構成が抱えている課題は何であろうか。以下の3点を指摘することができる。

第1に，現代社会の「倫理的課題」の認識が十分できないことである。なぜなら，先ずそれらの課題は基本的に最後尾の大項目（3）で（一部は選択して）扱うことになっているだけであり，年間を通して学習するようになっていないからである。なお，導入として位置づく大項目（1）では，「自分の生き方にとって身近な問題が現代の倫理的課題にかかわってくることに気付かせ」とあるが，続く大項目（2）では，人間の存在や価値という原理的・根本的な内容を学習するようになっている。大項目（1）（2）の内容構成では，その箇所を学習をしている期間，生徒は課題に気付くだけで，十分に認識することができないのである。現代社会の「倫理的課題」は事実認識を通さなければ把握できない。それに対する価値判断もできない。しかし，この内容構成では，生徒は諸課題について十分な事実認識をしないまま，大項目（3）でそれらを選び，追求することになる。現代社会の「倫理的課題」に対する価値判断を積み重ね，その総体となる価値観を形成していこうとすれば，年間を通して，事実認識を踏まえた課題の認識とそれに対する価値判断を行う必要があるはずである。また列記されている課題は，「政治・経済」で事実認識を深めてから扱うほうが良いものが多い。しかし「政治・経済」の内容構成では，「現代社会の諸課題」は年間カリキュラムの最後に扱うことになっており，それらの課題を「倫理」で原理的（倫理的）に追求しようとする

と，仮に同学年で両科目を学習するとしても年度末まで待たねばならない。結局，年間を通して事実認識をよく踏まえた「倫理的課題」の認識と追求は困難となる。

第2に，現代社会の「倫理的課題」に対する手掛かりとして先哲の思想（すなわち価値観）を扱うことが難しいことである。結局，先哲の思想を理解させることに止まってしまうのである。なぜなら，先哲の思想を手掛かりにすることを本文中明記しているのは大項目（2）であるが，ここでは人間の存在あるいは価値，具体的には哲学，宗教，芸術の意義，また日本人の人間観や自然観，宗教観に関する先哲の思想を手掛かりとして学習するようになっているからである。大項目（1）で「現代の倫理的課題に取り組む上で，先哲の思想が手掛かりとなることを気付かせる」（文部科学省，2010）のであれば，続く大項目（2）では，現代社会の「倫理的課題」を，その手掛かりとなる先哲の思想とともに扱うと考えられるが，実際には人間の存在や価値と，そのための先哲の思想が取り上げられるにとどまる。仮にその中に，大項目（3）で現代社会の「倫理的課題」を追求するための手掛かりになるものがあるとしても，ここではそれらと充分に関連させず，先に理解させておくことになる。なお大項目（2）で，いかに先哲の思想を手掛かりとするかについては，解説中に「先哲がどのように問い，どのように答えを求めているかを参考にしながら，自らの答えを求めて思索を深めさせる。」（文部科学省，2010）とあるだけで十分示されていない³⁾。これは単元構成上の課題でもある。

第3に，倫理的な見方や考え方を獲得させることが難しいことである。いかに，現実の社会の中から倫理的問題を自己の課題としてとらえ，追求すればよいのかがわからなければ，自ら価値観を形成できるようにはならない。そのためには，現代社会の問題を倫理的視点からとらえ，

自己の課題として追求していくための倫理的な見方や考え方が必要であり、「倫理」で育成すべき市民的資質の中核をなすともいえる。ただしこれを獲得するには、その方法について学習するとともに、実際に、現代社会の事実認識を通して、そこに内包される倫理的問題や課題を認識し、それに対する手掛かりを得ながら価値観を修正してやることを繰り返す必要がある。しかし、こうした学習は基本的に大項目(3)で行うことになる。それまでは(事実認識も含めて)現代社会の「倫理的課題」について特に学習するようになっていないのである。したがって生徒は現代社会の中で何が倫理的問題であり、それに対して自分はどのような価値観を持っており、自己の課題として、いかに追求していけばよいのかほとんど学習しないまま、大項目(3)で現代社会の「倫理的課題」を選択し追求しなければならず、ここから倫理の見方や考え方を獲得していくことはさらに難しいのである。

これらの課題の根本的な要因には、この内容構成が現代社会の倫理的問題の認識を中心に位置付けていないことがある。なぜなら、「倫理」で育成を目指しているのが、現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成していく資質である以上、大項目(1)の学習では、現代社会の中で生きる自己の形成について、続く大項目(2)では、現代社会で生きる自らの存在や価値についてそれぞれ追求する必要があるにもかかわらず、その前提となる現代社会についての事実認識と倫理的問題及び課題の認識は、最後の項目(3)で行うようになっているからである。結果として学習は、手掛かりであるはずの先哲の思想(価値観)を理解しておき、現代社会を倫理的な視点から捉え、追求してやることは十分できないものになる。

では、このような価値観を理解する学習から脱して、現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成していく学習に転換するためには、

どのようなカリキュラムが必要となるだろうか。

3. 「倫理」カリキュラム改善の視点

3.1 「価値観理解学習」から「価値観形成学習」へ

「倫理」の学習は、現代社会の倫理的問題を十分認識させないために、その手掛かりであるはずの価値観を理解しておく、いわば教養主義的な「価値観理解学習」から、現代社会の事実認識を通して、内包される倫理的問題を認識し、価値観は手掛かりとしながら、自己の価値観を形成していく「価値観形成学習」へと転換する必要がある。この学習では、既述の通り、「倫理」における市民的資質育成の観点から、現代社会の倫理的問題の認識が必要である⁴⁾。また、新たな倫理的問題に気付く度、より手掛かりとなる価値観を獲得する度に、我々が自己の価値観を形成し直すことを踏まえると、この学習では倫理的問題に対する自己の価値観を形成できるようになること、すなわち価値観を形成するだけでなく、その方法を獲得することが重要になる。では、このような学習を行うための「倫理」カリキュラムは、どのような視点で編成する必要があるだろうか。

3.2 「価値観形成学習」に基づくカリキュラム編成の視点

3.2.1 現代社会の倫理的問題の認識

カリキュラムは、先ず現代社会の倫理的問題を中心にしたカリキュラム編成にする必要がある。それに対する価値観を形成していくためであり、課題を十分認識しなければ、結局、手掛かりであるはずの価値観を理解しておく学習に止まってしまうからである。では、現代社会の倫理的問題とはいかなるものだろうか。それは生徒がこれから直面することになるであろう現実の社会に内包されている原理的、すなわち倫理的な問題である。具体的には、倫理学の中で

も応用倫理学（基本線として生命倫理学，環境倫理学，企業倫理学，情報倫理学（加藤，2001））が究明しようとしている問題群である。なぜなら，これらは「現実的な問題のなかに潜む倫理問題」（加藤，2008）であり，今や「倫理学のより根本的な問題」（大庭，2006）なのであり，応用倫理学では，これらを分析し，特定の原理の適用にこだわることなく，新たに倫理基準を作ろうとしている（加藤，2008）からである。生徒は，現実社会でこれらの問題に直面することになるであろうし，その時，自らの基準，自己の価値観を形成することになるからである。限られた「倫理」の時間数の中で学習すべき課題は，先ずこうした問題群から選ぶ必要がある。なお，科学技術の進歩が生命倫理，情報倫理，環境倫理などの問題の前提となっていること（加藤，松山，1996）も考慮しておく必要がある。

また，これらの問題が生じる現代社会のシステムの基軸となっているのは（功利主義的）自由主義であり，政治的には（議会制）民主主義と，経済的には資本主義（加藤，1997；藤原，1993）である。したがって，先ず民主主義と資本主義に関する倫理的問題を取り上げ再点検しておく必要がある（川本，1995）。

3.2.2 価値観形成アプローチ

次に，カリキュラムを自己の価値観を形成できるように編成する必要がある。すなわち，倫理的問題に対する自己の価値観を形成していくように，カリキュラム全体を編成するとともに，各単元も構成する必要がある。なぜなら，自ら価値観を形成してみなければ，またそれを繰り返してみなければできるようにはならないからである。

カリキュラム全体は以下のように編成する。

a 先ず，現代社会の倫理的問題を認識し，価値判断を行い，自己の価値観を表現してみる。また自

己の価値観形成の方法について説明してみる。

b 次に，関連する現代社会の倫理的問題を認識し，それぞれに対する価値判断を行う。

c これまでの学習を踏まえて，aで取り上げた倫理的問題を認識し直し，積み重ねてきた価値判断の内容（すなわち自己の価値観）を踏まえて価値判断し直し，先に表現していた自己の価値観との異同を自覚する。また自己の価値観形成の方法について説明し直し，先の説明との異同を自覚する。

※なお，倫理的問題の認識は全て事実認識を通して行う。

このカリキュラム編成では，生徒が事実認識をふまえた現代社会の倫理的問題の認識と価値判断を繰り返すようになっており，これによって，現代社会に対する事実認識を成長させつつ，価値判断を積み重ね，自己の価値観を自覚的に形成していくことができる。また，これまで自己の価値観をどのように形成してきたか（できたか）を説明していくことで価値観形成の方法も獲得させるのである。なお，自己の価値観形成の方法について説明してみることは，それを自ら獲得する，開かれた学習にするためにも重要である。

次に各単元は基本的に，a 先ず現代社会の倫理的問題を自己の課題として認識し，価値判断するパート，b 次に手掛かりとなる人物の価値観等について理解し，比較し，対話するパート，c その上で現代社会の倫理的問題を認識し直し，価値判断し直すパートで構成される。

このような単元の学習を繰り返すことで自己の価値観を形成できるようになると考えられるのである。特にbのパートは，人物の行為や生涯から価値判断，価値観さらに価値観形成の方法を見つけ出し，それを手掛かりにして倫理的問題を追求してみるようにする。「倫理」の学習を人物とその価値観について理解することに止まらず，人物を手掛かりにして自己の価値観を形成していく，すなわち形成するとともに形成

する方法も獲得していくものへと転換するためである。これを「人物研究」と呼ぼう。

この単元構成を説明するには、単元の学習の中でどのように価値観を形成させればよいのか、また、そもそも我々はどのように価値観を形成していくのかを明らかにしておく必要がある。そこで、これに関して価値観形成を通して公民科を変えようとした先行研究（吉村，1999；溝口，2002，桑原；2006，大杉；2011）を手掛かりとする。ここでは、自己の価値観形成を図る学習の中に、主観的な価値観を社会的過程に通すこと、自主的自律的な判断によって問題や判断基準を構築していくこと、他者によって異なっている判断を比較してみることで、先哲の構築した質的に高い価値的知識を用いて、社会的事象の価値的意味や意義を捉えさせてみることをそれぞれ組み込むべきことが明らかにされている。これらを踏まえると、単元の中には価値判断した内容（自己の価値観）を表現してみて、それを他者を通して反省する（換言すれば他者と対話する）、倫理的問題とそれに対する価値判断を自ら修正していく、他者の異なる価値判断の内容を比較してみる学習をそれぞれ組み合わせることになる。また、ここでの他者とは、他の生徒だけでなく、社会的事象に内包される倫理的課題を追求するために手掛かりとなる（質的に高い）価値観を持つものとなる。

ただ、これらの先行研究は我々の内面で起きる価値観形成のプロセスを十分明らかにしていないため、ここでは社会学の研究成果を手掛かりとする。見田（見田，1996）は主体の側からの価値を、「価値意識（ないし『価値観』）」ととらえる。パーソナリティの構成要素であり、「価値判断の総体」である価値意識の大部分は外在的な価値体系を内在化したものであり、具体的には、a その人の既存の欲求を充足、あるいは阻害する結果との連合、すなわち条件付け、b モデルについての個々の行動様式の模倣やより

広範囲な同一化、c 推理あるいは反省的思考による再調整と体系化というルートをとるとする。なお、このモデルの理解を通して形成された価値観も、新しい情報や知識を得ることで変容していくとする。

これを踏まえると、単元の中には、倫理的問題を自己の課題として認識する、モデルとなる人物の個々の行為（特に価値判断）や広範囲にはその生涯（特に価値観及び価値観形成の方法）を理解し反省（人物と対話）する、倫理的課題に対する自己の価値判断の内容と、それまでの自己の価値観との異同を自覚する学習を組み込む必要がある。ここでモデルとなるのは、学習している倫理的問題に関与してきた人物である。具体的には同様の問題に自己の課題として取り組み、価値判断を積み重ね、手掛かりとなる価値観等を形成してきた人物である。また社会の中で、他者とともに生き抜いてきた人物ともなる。「倫理」で育成したいのはこのような市民だからである。なお人物を複数取り上げることで比較することが可能となり、また開かれた学習となる。さらに自己の価値観として内在化・自律化（見田，1996）しやすいと考えられる。

以上の考察を踏まえて、あらためて単元構成を示すと次のようになる。

導入部	現代社会の倫理的問題を自己の課題として認識し、価値判断した内容（自己の価値観）を表現する。
展開部	この倫理的問題に対する手掛かりとなる人物の価値観等を理解し、比較し、対話（「人物研究」）する。
終結部	現代社会の倫理的問題について再認識し、価値判断し直し、その内容と導入部で表現していたこととの異同を自覚する。

4. 「倫理」カリキュラムの改善試案

4.1 カリキュラム構造

このような視点に基づく「倫理」カリキュラ

ムは図2のような構造となり、次のように展開する。(次の①～③は図2の①～③と対応している。)

① 現代社会に内包されている倫理的問題を自己の課題として認識し、それに対する価値判断した内容（自己の価値観）を表現する。

また、人物の価値観等を手掛かりとして、倫理的問題に対する価値判断を積み重ね、総体となる自己の価値観を形成していくことを帰納的に説明してみる。

② 現代社会のシステム（民主主義、資本主義）に関する倫理的問題や科学技術の進歩により生じている倫理的問題（生命、情報、環境などに関する問題）について、「人物研究」によって得られた価値観等を手掛かりに、それぞれ価値判断し直し、総体となる価値観を形成する。

③ 現代社会の倫理的諸問題について認識し直し、価値判断し直し、その内容と、先に（①で）表現していたこととの異同を自覚する。また、「人物研究」により得られる価値観等を手掛かりとして、倫理的問題に対する価値判

断を積み重ね、その総体となる自己の価値観を形成していくことを帰納的に説明し直し、先の説明との異同を自覚する。

このカリキュラムの特徴は、年間を通して、現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成するだけでなく、形成の方法まで獲得する構造になっていることである。すなわち、年間を通して、現代社会に内包される様々な倫理的問題を認識し、「人物研究」により得られる新たな価値観等を手掛かりにして、問題に対する自己の価値判断を反省し、修正し、積み重ねて価値観を形成し直していけるようになっている。また、これを繰り返すだけでなく、倫理的問題に対する自己の価値観を形成する方法について考える単元をカリキュラムの始めと終わりに設定することで、価値観形成の方法まで獲得させるようになっている。これにより生徒は、新たな異なる問題に対しても自己の価値観を形成していくことが出来るようになる。

なお、このカリキュラムで取り上げる倫理的問題としては、既述のとおり生命、情報、環境に関するものと、これらの倫理的問題の生じる

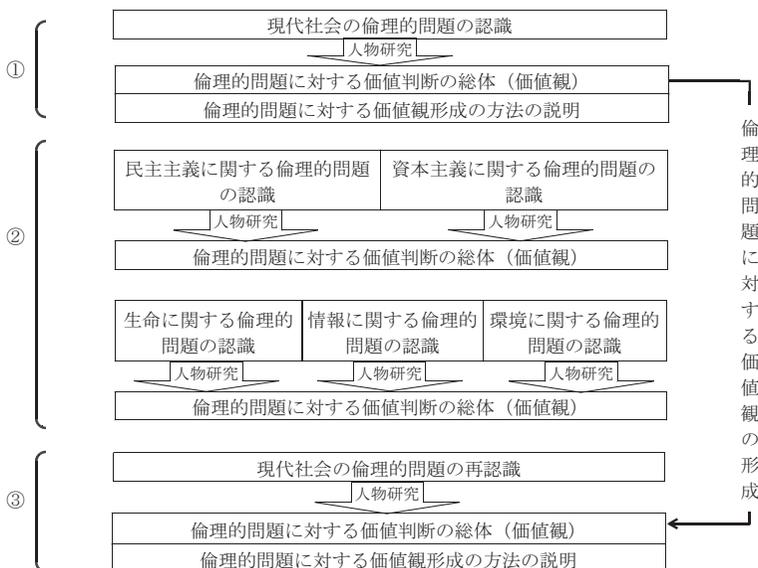


図2 「倫理」カリキュラムの構造

現代社会のシステムを形づくる民主主義、資本主義に関するものが考えられる。この内、民主主義と資本主義については早い段階で再点検しておく必要がある。例えば今日の民主主義を早い段階で取り上げることで、年間を通して扱う個々の倫理的問題を、民主主義の本質とその課題を踏まえて追求できるようになるからである。

4.2 カリキュラムデザイン試案

このカリキュラム構造を基に編成したカリキュラムデザイン試案は表1のようになる。(表中の(1)~(3)は、図2の①~③と対応している。)

この試案では、公民科「倫理」の標準単位数2単位(70単位時間)で実施されることに合わ

表1 「倫理」カリキュラムデザイン試案

内容 (単位時間数 全70)	小単元名	小単元のねらい <中心的な学習課題例> 「関連する発問例」	研究する 人物の例	取り扱う 事象や 知識の例	
(1) 私たちが生きる現代社会の問題 (12)	社会の問題は関係ない?	現代社会の倫理的問題を自己の課題として認識する。価値判断し、自己の価値観を表現する。 <現代社会の倫理的問題はだれの課題か。> 「その問題は、自分にはどのような関係があるだろうか。」	自己	東日本大震災 原子力発電所事故	
	哲学者と心理学者の技は?	現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観形成について説明してみる。 <現代社会の倫理的問題をいかに考えたらいいか。> 「私たちは、自分の考え方(価値観)をどう形成してきただろうか。」	サンデル & エリクソン	対話 アイデンティティ 価値観 人物の研究	
(2) 現代社会の倫理的特質と問題 (46) ア 現代社会の倫理的特質 (16) a 民主主義と倫理 (8)	プラトンと師ソクラテスの悩み	民主主義社会に生きる自己が抱えている倫理的問題を認識し、価値判断する。 <民主主義が危機に陥ったとき、市民である自分はどう行動すべきか。> 「なぜ、プラトンは民主主義を批判したのか。」	プラトン & ソクラテス	消費税増税 選挙制度改革 衆愚政治 対話法	
	b 資本主義と倫理 (8)	ジョブズとゲイツの企み	資本主義社会に生きる自己が抱えている倫理的問題を認識し、価値判断する。 <資本主義の仕組みの中で、生産者も消費者も幸せになるには、企業はどのような商品を生産すべきか。> 「ジョブズ(ゲイツ)はそのような考え方をどのように形成したのか。」	ジョブズ & ゲイツ	消費社会 企業の社会的責任 市場機構の限界
イ 現代社会の倫理的諸問題 (30) a 生命と倫理 (10)	山中教授と日野原医師の願い	私たちの生命が抱えるようになっている倫理的問題を認識し、価値判断する。 <私たちは、お互いに、どこまで延命すべきか。> 「2人の人間の生命に対する考え方の違いは何か。」	山中伸弥 & 日野原重明	生命の質 生命の尊厳 自己決定権 リビングドゥール	
	b 情報と倫理 (10)	孫社長と三木谷社長の望み	私たちが求める情報が抱えるようになっている倫理的問題を認識し、価値判断する。 <情報社会で、私たちにとってもっとも大切な情報は何か。> 「2人の人物の生き方の共通する点は何か。」	孫正義 & 三木谷浩史	情報公開 知る権利 プライバシー 情報リテラシー
	c 環境と倫理 (10)	マータイとカーソンの挑戦	私たちがとりまく環境が抱えるようになっている倫理的問題を認識し、価値判断する。 <私たちは、誰のために環境を保護しなければ	マータイ & カーソン	地球有限主義 世代間倫理 自然の生存権

		ばならないか。> 「マータイ（あるいはカーソン）の主張に対して、あなたはどうか考えますか。」		生態系
(3) 現代社会に生きる私たちの問題 (12)	科学者たちの抱く責任と政治家たちの訴える未来	現代社会の倫理的問題を認識し直す。価値判断し直し、先に表現していた自己の価値観との異同を自覚する。 <私たちが、現代社会で生きるためにさらに考えるべき倫理的問題は何か。> 「手掛かりにしたい人物は誰か。」	アインシュタイン & 湯川秀樹 オバマ & ゴルバチョフ	震災からの復興 原子力エネルギー パグウォッシュ会議 資本主義 民主主義
	市民である自分の課題として考えてみよう	現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観形成について説明し直し、先の説明との異同を自覚する。 <現代社会で生きる市民として、倫理的問題をいかに考えるか。> 「自分の考え方はどう変わったか。」 「自分の考え方をどう形成してきたか。」	自己	理解 比較 対話 「人物研究」

せて、各単元レベルの単位時間数を示した。

民主主義、資本主義、生命、情報、環境に関する倫理的問題例は、各小単元の「中心的な学習課題例」として示した。

また「研究する人物の例」には、各倫理的問題に関与し、その活動内容や思想（価値判断や価値観）についての資料（書籍、記事等）が比較的得やすい人物を基本的に複数例示した。

さらに「取り扱う事象や知識の例」には、人物例と対応して取り扱いたい事象、価値観形成の方法の説明に必要と考えられる知識などを示した。

この試案の特徴をあげると、現代社会の倫理的問題を年間を通して学習することができ、扱う倫理的問題を精選し時間数を確保することで、事実認識をよく踏まえて現代の社会が内包する倫理的問題を認識し、追求していくことができる。すなわち現代社会の倫理的問題の認識を中心にした編成なのである。また、各単元で例示した人物はそれぞれの倫理的問題に対する手掛かりとして学習（「人物研究」）するようになっている。さらに、年間の始めと終わりには価値観形成の方法について学習するようになっている。これらの特徴により現代社会の倫理的問題の認識を通して、自己の価値観を形成していく

ための資質育成をめざしているのである。

5. おわりに

本研究の成果は次の3点である。1点目は、公民科「倫理」の内容構成が、事実認識を踏まえた倫理的問題の認識を中心にしておらず、先哲とその思想を理解させることに止まり、現実の社会にある倫理的問題を認識し、様々な人物の価値観を手掛かりにして追求し、自己の価値観を形成していくようになっていないという、市民的資質育成上の課題を抱えていることを明らかにした。

2点目は、この課題を克服しカリキュラムを改善する視点として、「価値観形成学習」への転換が必要であること、そのために現代社会の倫理的問題を中心にしたカリキュラムを編成すること、倫理的問題に対する自己の価値観を形成していくように、カリキュラム全体を編成し各単元も構成することが必要であることを明らかにした。

3点目は、この視点に基づき、年間を通して現代社会の倫理的問題に対する自己の価値観を形成するだけでなく、形成する方法も獲得していく、すなわち現代社会の倫理的問題を認識し、人物の価値観等を手掛かりにして、自己の価値

観を形成していく資質を育成できるカリキュラムの構造とそのデザイン試案を示した。

残された課題としては、あくまでも構想段階にあるこのカリキュラムデザインの精度を高め、カリキュラムプランへと高めていくことがある。そのためには、各単元の開発を行い、それを高等学校の生徒への実践を通し、その結果をもとに吟味し修正していく必要がある。

注

- 1) 従来の実践上の課題を克服しようとした代表的な例として、教養主義に陥ることなく、「先哲の思想で教えることを目標」にした実践（児玉，2004）があるが、現代社会の倫理的問題をほとんど扱わず、先哲とその思想に関わる知識を豊かにさせようとすることに止まっている。また現代社会の倫理的問題を中心に扱った代表的な実践例（大塚，1993；熊田，1998；中 寛，2000；大 谷，2002）は、いずれも「倫理」で扱うべき倫理的問題をいかにカリキュラムに位置づけるべきかまで十分明らかにしていない。
- 2) 倫理的な見方や考え方という表現が用いられたのは、平成11年版公民科「倫理」からであるが（文部科学省，1999）、「人生や社会の問題を自分自身の問題として、主体的に考える態度や習慣を身に付けさせる」（文部省，1989）ことを重視するという点は変わっていない。
- 3) 同解説は他に「3 指導計画の作成と指導上の配慮事項」の中で、知識の習得に終わらせたり、学習への意欲を減退させたりしないために「先哲の生き方・考え方を生徒のもつ課題や悩みなどと結び付け」るよう求めているが（文部科学省，2010）、ここでも現代社会の倫理的問題に対していかに手掛かりとすべきかは必ずしも明らかでない。
- 4) 「倫理」の基盤と考えられる現代の倫理学や哲学も科学的な社会認識を、その前提として必要としている（澤瀉，1967；加藤，1993）。

参 考 文 献

- 澤瀉久敬（1967）『哲学と科学』日本放送協会，p. 129.
- 大杉昭英（2011）「社会科における価値学習の可能性」、『社会科研究』第75号，pp. 1-10.

- 大谷いづみ（2002）「高等学校公民科『倫理』におけるカルト対策授業の試み—『自分探し』に着目して—」、『社会科教育研究』No. 87，pp. 64-74.
- 大塚健司（1993）「高校倫理で体系性と主題性を統合する試み—『競争』を教材化する—」、『公民教育研究』Vol. 1，pp. 49-64.
- 大庭健他編（2006）『現代倫理学事典』弘文堂，p. 94.
- 加藤尚武（1993）『二十一世紀のエチカ』未来社，pp. 228-229.
- 加藤尚武，松山壽一編（1996）『改訂版 現代世界と倫理』晃洋書房，ii.
- 加藤尚武（1997）『現代倫理学入門』講談社，pp. 3-9.
- 加藤尚武（2001）『応用倫理学入門—正しい合意形成の仕方—』晃洋書房，i，p. 184.
- 加藤尚武他編（2008）『応用倫理学事典』丸善，i-ii.
- 川本隆史（1995）『現代倫理学の冒険』創文社，p. 119.
- 熊田 亘（1998）『高校生と学ぶ死—「死の授業」の一年間—』清水書院.
- 桑原敏典（2006）「合理的な思想形成をめざした社会科授業構成—シティズンシップ・エデュケーションの目的と社会科の役割の検討を踏まえて—」、『社会科研究』第64号，pp. 41-50.
- 児玉康弘（2004）「『公民科』における解釈批判学習」、『社会系教科教育研究』第16号，pp. 73-81.
- 中 寛裕一（2000）「公民科『倫理』グループ・プレゼンテーションの実践とその検討」、『社会科教育研究』No. 83，pp. 45-54.
- 藤原保信（1993）『自由主義の再検討』岩波書店，p. 6.
- 溝口和宏（2002）「開かれた価値観形成をめざす社会科教育—『意思決定』主義社会科の継承と革新—」、『社会科研究』第56号，pp. 31-40.
- 見田宗介（1996）『価値意識の理論』弘文堂，p. 23, 68, 80, pp. 105-108, 169-179, 324-329.
- 文部省（1979）『高等学校学習指導要領解説社会編』一橋出版，p. 150.
- 文部省（1989）『高等学校学習指導要領解説公民編』実教出版，pp. 48-74.
- 文部省（1999）『高等学校学習指導要領解説公民編』実教出版，pp. 41-75.
- 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説公民編』教育出版，pp. 24-41.
- 吉村功太郎（1999）「社会科における価値観形成論の類型化—市民的資質育成原理を求めて—」、『社会科研究』第51号，pp. 11-20.